アジアサッカーにおける代表成績とクラブ成績との関係に関する研究[†]

杉原 海太* 平田 竹男** 政本 晶生**
久保谷 友哉**

Study on the Relationship between Performance of the National Team and That of Clubs in Asian Football[†]

Kaita SUGIHARA*, Takeo HIRATA**, Akio MASAMOTO**
and Tomoya KUBOTANI**

Abstract

The purpose of this paper is to discuss, in regard to Asian football teams, the question of whether improvement of club top team performance is a useful way to influence that of the senior national team's performance, by analyzing the linkage between the performance of the national team and that of club teams.

This paper examines the linkage between team performances for the 32 member associations of the AFC, which participated in the AFC Champions League, AFC Cup, and the AFC President's Cup between 2010 and 2013, by using correlation analysis and single regression analysis.

Results show that a correlation between performance of the national team and that of club teams is proved among the member associations participating in the AFC Cup and the AFC President's Cup, while it is not proved among the member associations participating the AFC Champions League. It indicates that strengthening club football is a useful way to strengthen the national team; specifically among the member associations participating in the AFC Cup and AFC President's Cup.

Key words : Asian Football, National Team, Club, Performance

1. 緒 言

2014年FIFAワールドカップ本大会はドイツの優勝で幕を閉じたが、日本を含めたアジアの代表チームは全てグループステージを突破できず、日本と韓国がグループステージ突破を果たした2010年大会に比べると残念な結果に終わった。それを受けてアジアサッカー連盟（以

下、AFC）のShaikh Salman bin Ebrahim Al Khalifa会長は「我々（アジアの国々）はレベルアップしなければならない¹⁾」と語っている。

では、代表チームのレベルアップにはどのような施策が必要となるのであろうか？ 近年日本のクラブはAFCチャンピオンズリーグ（以下、ACL）において苦戦しているが、日本サッカー協会の原専務理事は「代表を強くするには、

[†] 原稿受付 2014年10月22日 原稿受諾 2015年1月29日

* FIFA コンサルタント 〒120-0025 東京都足立区千住東2-20-12-1109

** 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-6-1

* FIFA Consultant, 2-20-12-1109, Senjuazuma, Adachi-ku, Tokyo, Japan (120-0025)

** Graduate School of Sport Sciences, Waseda University, 1-6-1, Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan (169-0051)

国内リーグのレベルを上げていかないといけない。ACLでなかなか結果が出せないのに、代表だけは勝ってくださいというのも難しい話だし²⁾」とコメントしている。このコメントからは、原専務理事が年齢制限の無い日本代表チームの成績（以下、代表成績）とクラブにおけるトップチームの成績（以下、クラブ成績）に関連があると考えている事が伺える。なお上記においては、日本サッカー協会の「JFA・Jリーグ サッカー用語集³⁾」における「Jクラブ（またはクラブ）」に記載されている「Jリーグの各クラブ。Jリーグに所属する、サッカーを専門とする運営会社。「チーム」は、Jクラブが有するトップ、サテライト、ユース、ジュニア等のそれぞれのチームを指すもので、クラブとは異なる」との解釈に従い、運営会社としてのクラブと大会に参加する主体としてのチームを区別して用いており、以下においても同様とする。実際に隣国の韓国は、代表チームは1986年以降8大会連続でFIFAワールドカップ本大会に出場し、クラブもACLがスタートした2002年以降、2006年・2009年・2010年・2012年に優勝、2004年・2011年に準優勝、と安定して好成績を収めている。その一方で、例えば2006年から3大会連続で本大会出場を果たしているオーストラリアは、2014年にウェスタン・シドニー・ワンダラーズが決勝進出を果たした以外は、日本と同様にACLで目立った成績を収めていない。AFCはアジアにおけるサッカー強豪協会のクラブだけが参加するACLに加えて、アジアにおけるサッカー中堅協会のクラブだけが参加するAFCカップ（以下、AFCC）及びアジアにおけるサッカー弱小協会のクラブだけが参加するAFCプレジデントスカップ（以下、AFCP。2014年大会をもって終了）も開催しているが、AFCCにおいても代表成績とクラブ成績に関連が見受けられるケースと見受けられないケースの両方が見られる。クウェートのクラブは2009年、2012年・2014年に優勝、2010年・2011年に準優勝とAFCCで近年圧倒的な強さを見せているが、クウェート代表チームは2010年ワールド

カップアジア予選・2014年ワールドカップアジア予選の両方で最終予選に勝ち進めなかった。またその一方で、バーレーンのクラブは2006年に準優勝、2008年に優勝と好成績を収め、バーレーン代表チームも2010年ワールドカップアジア予選において大陸間プレーオフまで勝ち進み、ワールドカップ本大会出場まであと1歩と迫った。

この様に代表成績とクラブ成績に関連が見受けられるケースと見受けられないケースの両方が見られる中、代表成績とクラブ成績の関連を統計学的に明らかにする事は、クラブのトップチームが好成績を収める為の施策（以下、クラブ強化）が、年齢制限の無い代表チームが好成績を収める為の施策（以下、代表強化）の1つと成り得るか、という点における示唆が期待できる。

代表成績に影響を及ぼす要因に関する過去の研究を見ると、世界76の国・地域に関して、FIFAランキングにおけるポイントと1人当たりGDP、年間平均気温、世界人口に占める当該国・地域の人口割合、ラテン系の国家・地域か否か、といった主に社会的・文化的要因との関連を分析したHoffmannら⁴⁾や、世界178の国・地域に関して、FIFAランキング及びFIFAランキングにおけるポイントと複数の社会的・政治的要因（国民1人あたりGDP、人口、Freedom house reportにおける自由度指数、共産主義及び旧共産主義国家であるか否か、OECDメンバーであるか否か、産油国か否か、旧植民地国であるか否か、等）及び複数のサッカーの要因（大陸連盟主催のクラブチャンピオンシップにおいて準々決勝に進出している当該国クラブ数、等）との関連を分析したLeedsら⁵⁾、2006年FIFAワールドカップ本大会に出場した32の国・地域に関して、サッカー選手の国際移籍と代表チームの成績の関連を分析し、国際移籍が活発な国・地域の代表チームが好成績を残している事を明らかにしたBaurら⁶⁾が存在するが、これらの先行研究において分析対象の多くは社会的・文化的・政治的要因と代表成績と

の関連である。これらの要因は、関連を示す事ができたとしても、協会の施策により解決する事は難しい要因である。その中で、協会の施策により解決が可能と考えられる、代表成績とクラブ成績の関連がLeedsら⁴⁾の研究において触れられているが、Leedsら⁵⁾はACLを含めた大陸連盟主催のクラブチャンピオンシップにおいて準々決勝に進出している当該国クラブ数との関連を分析し、アジアにおいて関連は見られないと結論付けている。

しかし、Leedsら⁵⁾の研究はAFCCやAFCPを分析対象外としACLのみを分析対象としており、その為上記の結論はアジアにおける全般的な傾向を示しているとは言えない可能性がある。また分析データも2006年大会の成績のみを対象としており、上記の結論は2006年における傾向としか言えない可能性もある。加えて、「準々決勝に進出している東アジアのチームは準々決勝に進出している西アジアのチームより強く、準決勝に至るまで東アジアのクラブと西アジアのクラブが対戦しないフォーマットであるACLにおいては、準々決勝進出する意義が、大陸連盟主催のクラブチャンピオンシップに比べ小さい可能性がある」と考察しているが、その根拠となる事実は示されておらず、実際に東アジアのクラブ対西アジアのクラブの対戦となった2006年ACL決勝は3対2と接戦になっており、主観的な考察である可能性がある。

そこで、本研究では、AFC加盟協会におけるサッカー代表チームの成績と当該協会におけるクラブのACL, AFCC, AFCPでの成績との関係について統計的に明らかにし、アジアにおいてクラブ強化が代表強化に繋がる有効な施策の1つと成り得るか考察を行う事を目的とする。

2. 研究手法

2.1 分析対象

本研究では、代表チームの試合が4年周期でスケジュールされている事を考慮し、ACLに参加するAFC加盟協会のサッカー代表チーム

の成績(以下、代表成績)として、2010年から2013年の4年間の成績を対象とした。

また当該協会におけるクラブのACL, AFCC, AFCPでの成績(以下、クラブ成績)に関しても同様に、2010年から2013年の4年間の成績を対象とした。

分析対象となる加盟協会は、2010年から2013年の間に開催されたACL, AFCC, AFCPの何れかに参加した延べクラブ数が4以上である32加盟協会とした。なおウズベキスタンはAFCCもACLも参加しているが、延べクラブ数がより多いACL参加加盟協会として扱った。

2.2 分析データ

代表成績については、FIFA公式サイト内のFIFA/Coca-Cola World Ranking⁷⁾において2013年12月19日付に発表されたランキングを基に、ACL参加加盟協会におけるランキング(以下、ACL内FIFA Ranking), AFCC参加加盟協会におけるランキング(以下、AFCC内FIFA Ranking), AFCP参加加盟協会におけるランキング(以下、AFCP内FIFA Ranking)を用いる。なおFIFA/Coca-Cola World Rankingは、過去4年間の代表チームの試合結果に基づき算出されたポイントを基に決定されている。

クラブ成績に関しては、ヨーロッパ大陸連盟(以下、UEFA)が用いているUEFAチャンピオンズリーグにおける協会係数の算出方法⁸⁾を基に、ACL Point, AFCC Point, AFCP Pointの算出方法を定義し、算出されたポイントを基にACL Ranking, AFCC Ranking, AFCP Rankingを求め、クラブ成績とする。具体的には、まずACL, AFCC, AFCPにおいて勝利したクラブは2ポイント獲得し、引き分けたクラブは1ポイント獲得し、負けたクラブは獲得ポイント無しとする。次に、協会毎に、当該クラブの2010年から2013年のACL, AFCC, AFCPにおける成績に基づき獲得ポイントを集計し、それを延べ参加クラブ数で除した値をそれぞれACL Point, AFCC Point, AFCP Pointとする(小数点以下は四捨五入)。最後に、

ACL Point, AFCC Point, AFCP Pointに基づき, ACL Ranking, AFCC Ranking, AFCP Rankingを算出する.

Leedsら⁵⁾はACLを含めた大陸連盟主催のクラブチャンピオンシップにおいて準々決勝に進出している当該国クラブ数との関連を分析しているが, 2010年から2013年のACLにおいては協会毎の参加クラブ数が異なる為, 本研究においては不適当であるとした.

なお当該期間のACL, AFCC, AFCPにおける試合結果に関しては, AFC公式サイトにはデータが存在しない為, SOCCERWAY (<http://int.soccerway.com/>)⁹⁾を参照した.

2. 3 分析手法

各協会の代表成績とクラブ成績との関係を検証するために, 相関分析及び単回帰分析を行った.

相関分析に関しては, 浦和レッドダイヤモンズにおける順位, 観客数, 営業収入等の相関を分析した平田ら¹⁰⁾でも用いられているスピアマンの順位相関係数を用い, ACL内FIFA RankingとACL Ranking, AFCC内FIFA RankingとAFCC Ranking, 及びAFCP内FIFA RankingとAFCP Rankingに関して分析を行った.

また, 単回帰分析に関しては, ACL内FIFA Ranking (従属変数) とACL Ranking (独立変数), AFCC内FIFA Ranking (従属変数) とAFCC Ranking (独立変数), 及びAFCP内FIFA Ranking(従属変数)とAFCP Ranking(独立変数) に関して分析を行った.

なお, 相関分析及び回帰分析を行うにあたっては, IBM SPSS Statistics 19を用いた.

3. 研究結果

表1に当該加盟協会におけるACL内FIFA Ranking及びACL Ranking, 表2に当該加盟協会におけるAFCC内FIFA Ranking及びAFCC Ranking, 表3に当該加盟協会におけるAFCP内FIFA Ranking及びAFCP Rankingを示した.

これらのデータが相関分析及び単回帰分析の入力データとなっている.

相関分析及び単回帰分析により算出されたスピアマンの順位相関係数及び決定係数を表4に示す.

ACL内FIFA RankingとACL Rankingに関しては, スピアマンの順位相関係数は0.333となり有意ではなく, AFCC内FIFA RankingとAFCC Rankingに関してはスピアマンの順位相関係数

表1 当該加盟協会におけるACL内FIFA Ranking 及びACL Ranking

加盟協会	ACL内 FIFA Ranking	ACL Ranking
Korea Republic	3	1
Saudi Arabia	7	2
Iran	1	3
Japan	2	4
Qatar	9	5
Uzbekistan	5	6
China PR	8	7
Australia	4	8
United Arab Emirates	6	9

表2 当該加盟協会におけるAFCC内FIFA Ranking及びAFCC Ranking

加盟協会	AFCC内 FIFA Ranking	AFCC Ranking
Thailand	10	1
Kuwait	3	2
Iraq	4	3
Jordan	1	4
Syria	6	5
Vietnam	9	6
Malaysia	12	7
Indonesia	14	8
Hong Kong	8	9
Lebanon	5	10
Myanmar	7	11
Oman	2	12
Singapore	11	13
Maldives	15	14
India	13	15
Yemen	16	16

表3 当該加盟協会におけるAFCP内FIFA Ranking
及びAFCP Ranking

加盟協会	AFCP内 FIFA Ranking	AFCP Ranking
Kyrgyzstan	2	1
Chinese Taipei	3	2
Turkmenistan	1	3
Cambodia	6	4
Pakistan	5	5
Nepal	4	6
Bhutan	7	7

は0.538となり5%水準で有意, AFCP内FIFA RankingとAFCP Rankingに関してはスピアマンの順位相関係数は0.750となり10%水準で有意, となった.

単回帰分析の結果, ACL内FIFA RankingとACL Rankingについての決定係数は0.111, AFCC内FIFA RankingとAFCC Rankingについての決定係数は0.290, AFCP内FIFA RankingとAFCP Rankingについての決定係数は0.563であった.

これらの結果から, AFCCとAFCPに関しては代表成績とクラブ成績の間に相関が存在する一方, ACLに関しては相関が存在しない事がわかった.

表5に当該加盟協会におけるACL内FIFA Ranking, ACL Ranking, 及び残差を示す. 決定係数が最も小さいACL内FIFA RankingとACL Rankingに関して更に詳細な傾向を分析すると, 残差が正の値であり且つ絶対値が大きいカタール, サウジアラビア, 中国といった協会及び残差が負の値であり且つ絶対値が大きいイラン, 日本, オーストラリアといった協会が決定係数の小ささに寄与している事が散見された.

4. 考 察

ACL内FIFA RankingとACL Rankingに関しては, 相関分析及び単回帰分析の結果, 両者の間に相関が見受けられず, Leedsら⁵⁾の研究と同様の結論を得た. これはACLに参加する協会においては, クラブ強化は必ずしも代表強化

表4 順位相関係数及び決定係数

	相関分析	単回帰分析
	スピアマンの順位相関係数	決定係数
ACL内FIFA Ranking及びACL Ranking	0.333	0.111
AFCC内FIFA Ranking及びAFCC Ranking	0.538**	0.290
AFCP内FIFA Ranking及びAFCP Ranking	0.750*	0.563

** 5%水準で有意

*10%水準で有意

表5 当該加盟協会におけるACL内FIFA Ranking, ACL Ranking、及び残差

加盟協会	ACL内FIFA Ranking	ACL Ranking	残差
Korea Republic	3	1	-0.7
Saudi Arabia	7	2	3.0
Iran	1	3	-3.3
Japan	2	4	-2.7
Qatar	9	5	4.0
Uzbekistan	5	6	-0.3
China PR	8	7	2.3
Australia	4	8	-2.0
United Arab Emirates	6	9	-0.3

回帰係数: 0.333 切片: 3.333

の為の有効な施策ではない事を示している。

その一方で、AFCC内FIFA RankingとAFCC Ranking、及びAFCP内FIFA RankingとAFCP Rankingに関しては、代表成績とクラブ成績の相関が見受けられた。即ち、AFCC、AFCPに参加するアジアの中堅・弱小協会においては、クラブ強化は代表強化の為の有効な施策の1つである事を示している。

ACLとAFCC・AFCPの間で結果が異なった理由として以下の2点が考えられる。1点目は「ACL参加協会においては、AFCC参加協会やAFCP参加協会に比べ、一部のクラブが非常に優秀な外国人選手を有している為、代表成績に比べACL成績が良くなる」という点であり、2点目は「ACL参加協会においては、AFCC参加協会やAFCP参加協会に比べ、一部の代表チームがアジアよりレベルの高いヨーロッパのリーグでプレーしている選手を有している為、ACL成績に比べ代表成績が良くなる」という点である。

表5において、残差が正の値であり且つ絶対値が大きいカタール、サウジアラビア、中国といった協会は上述の1点目に該当すると考えられる。例えば、2011年に優勝したカタールのアル・サッドはフランスリーグで101ゴールの実績を持つセネガル人選手、2012年に準優勝したサウジアラビアのアル・アハリは得点ランキング3位となったブラジル人選手、2013年に優勝した中国の広州恒大は得点ランキング1位のブラジル人選手及び2位アルゼンチン人選手をそれぞれ有していた。

また、表5において残差が負の値であり且つ絶対値が大きいイラン、日本、オーストラリアは上述の2点目に該当すると考えられる。例えば、2011年アジアカップの登録メンバーを見ると、イランのネコナム、日本の香川、オーストラリアのケーヒル、といったヨーロッパのクラブで主力として活躍する選手を有していた。

冒頭で述べたように日本のクラブは近年ACLで苦戦を強いられているが、上記の結果から、代表の成績への影響は必ずしも大きい訳

ではないと考えられ、原専務理事のコメントは必ずしも妥当ではない可能性がある。

その一方で、ACLにおける日本のクラブの苦戦により、Jリーグのアジアにおけるイメージダウンの可能性も考えられる。折しもJリーグはアジア戦略と銘打ってアジアへの売り込みを試みているが、JリーグクラブのACLにおける成績とJリーグの商業的価値の関連に関しては今後の研究課題の1つであると考えられる。

5. 結 論

本研究では、AFCに加盟する32協会における代表成績とクラブ成績との関係について統計的に明らかにし、アジアにおいてクラブ強化が代表強化に繋がる有効な施策の1つと成り得るか考察を行う事を目的とした。

代表成績にはFIFA/Coca-Cola World Rankingを基に、ACL内FIFA Ranking、AFCC内FIFA Ranking、AFCP内FIFA Rankingを、クラブ成績にはACL、AFCC、AFCPにおける成績を数値化したものを用い、代表成績とクラブ成績との関係について単回帰分析及び相関分析を行った。

分析結果から、ACL参加協会においては代表成績とクラブ成績の相関は見受けられず、ACLに参加するアジアの強豪協会においては、クラブ強化は必ずしも代表強化の為の有効な施策ではない事が示された。その一方で、AFCC・AFCP参加協会においては代表成績とクラブ成績の相関が見受けられ、AFCC、AFCPに参加するアジアの中堅・弱小協会においては、クラブ強化は代表強化の為の有効な施策の1つである事が示された。

参 考 文 献

- 1) <http://www.the-afc.com/en/afc-president-sub/afc-pres-news/28939-afc-president-remains-positive-on-asia-s-potential.html>.
- 2) <http://sportsnavi.yahoo.co.jp/sports/soccer/japan/2014/columndtl/201409270002-spnavi>.

- 3) [http : //www.jfa.or.jp/jfa/terminology/](http://www.jfa.or.jp/jfa/terminology/).
- 4) Hoffmann, Robert., et al. : The Socio-economic determinations of intentional soccer performance, Journal of Applied Economics, Vol.V, No.2, pp.253-272, 2002.
- 5) Leeds, Michael A. and Leeds, Eva Marikova. : International soccer success and national institutions, Journal of Sports Economics, 10.4, pp.369-390, 2009.
- 6) Baur, Dirk. and Sibylle Lehmann. : Does the mobility of football players influence the success of the national team?, IIIS Discussion Paper No.217, Available at SSRN : [http : //ssrn.com/abstract=980936](http://ssrn.com/abstract=980936) or [http : //dx.doi.org/10.2139/ssrn.980936](http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.980936), 2007.
- 7) FIFA/Coca-Cola World Ranking, [http : //www.fifa.com/worldfootball/ranking/lastranking/gender=m/fullranking.html](http://www.fifa.com/worldfootball/ranking/lastranking/gender=m/fullranking.html).
- 8) [http : //www.uefa.com/MultimediaFiles/Download/Regulations/competitions/Regulations/01/94/62/34/1946234_DOWNLOAD.pdf](http://www.uefa.com/MultimediaFiles/Download/Regulations/competitions/Regulations/01/94/62/34/1946234_DOWNLOAD.pdf).
- 9) [http : //int.soccerway.com/](http://int.soccerway.com/).
- 10) 平田竹男, 他; 浦和レッドダイヤモンズの自律的経営と成長要因, スポーツ産業学研究 Vol.18, No.1, pp.59-77, 2008.